



福井市自然史博物館

博物館だより

FUKUI CITY MUSEUM OF NATURAL HISTORY NEWSLETTER



Photo by H. YAMAMOTO 2004.6.16 武生市勝蓮花

福井の自然史情報

しょうれんげ かつだんそう ろうとう
勝蓮花の活断層露頭

たけふ しょうれんげ かつだんそう ろうとう
武生市勝蓮花の道路工事現場で見事な活断層の露頭が出現しました。

ろうとう きばんがん おお だんきゅうれきそう だんそう
露頭では基盤岩やこれを覆っている段丘礫層が断層によって切られ、垂直方向に
へんい
約3m変位している様子が観察できます。

れきそう さでいそう めいりょう
また礫層を覆っている砂泥層は断層で明瞭に切られてはいませんが、断層付近で
変形し、同様に垂直方向に約3m変位しています。

さて、断層がどこにあるかわかりますか？



答え：裏面に詳しい解説があります。

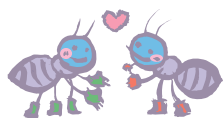
どうぶつたちのプロポーズ大作戦!! の大作戦!

特別展のひそかな協力者

石田 惣 (当館学芸員)

博物館では2004年7月21日から9月26日まで、特別展「どうぶつたちのプロポーズ大作戦!!」を開催しました。これはオスの角や牙、派手な体つきが進化するしくみの「性淘汰(せいとうた)」を、標本と映像でわかりやすく紹介するものです(詳しい展示内容は前号をご覧ください)。開幕直前の7月18日に豪雨に見舞われ、博物館が避難所になってしまうというハプニングもありましたが、当初の予定日にオープンし、期間中約2700名のご来館がありました。この場を借りてお礼申し上げます。

さて、特別展には多くの方々のご協力が欠かせませんが、今回はその中でも意外な?協力者がいたのです。さまざまなエピソードを交えながら、その舞台裏をご案内しましょう。



協力者その1

動物行動の映像データベース



■「動物行動の映像データベース」

そもそも、今回の求愛行動の映像展示というアイデアは、「動物行動の映像データベース」(<http://www.momo-p.com/>)というサイト

から生まれました。これは日本動物行動学会の会員有志が運営する、動物の行動のデジタル動画のデータベースです(私石田も運営に関わっています)。動物行動学者は研究の過程でビデオを使うことがありますが、このデータベースは彼らが撮った映像をデジタル化して登録し、公開してもらうというしくみです。

その運営委員会は「映像の教育的活用」の開発も活動目的の一つです。そこで自然史博物館の展示で映像は使えないだろうか、という議論がなされ、今回の特別展のアイデアが浮かんできた、というわけです。実際、展示映像の半数以上は登録映像を使いました。ちなみに、データベースの映像は「非営利の教育・研究目的」であれば誰でも無償で二次利用(複製や頒布等)ができます。また、映像の登録も研究者に限らず誰でもできます。実は次ページのコラムのジュニア学芸員が撮影したゲンジボタルの映像も、彼らの手でデータベースに登録されました。このように動物行動の映像データベースは誰にでも開かれ、使えるツールを目指しています。ぜひ一度アクセスしてみてください。

協力者その2

カワニナ・スガイなどなど...



■グッピーの水槽で働くカワニナ

特別展ではオスが派手になる例としてグッピーを、性転換の例としてハクマノミを生体で展示しました。これも人気のコーナーでしたが、水槽は数日もすればガラスに必ず「藻」が生えてきます。見栄えを考えると掃除する必要がありますが、学芸員(特に石田)はみんな面倒くさがりなので、できれば掃除はしたくありません。そこで藻食の巻き貝を入れることにしま

した。グッピーには市内の田んぼでとってきたカワニナを、ハクマノミには鷹鷹の磯のスガイやオオコシダカガンガラを入れました。通常、掃除貝はサカマキガイや観賞用の輸入種を使うことが多いのですが、福井っ子ネイティブを使うあたりが自然史博物館なわけです。彼らは毎日せっせと働き、私たちはほとんど掃除をせずに済みました。閉幕後、役目を終えた福井っ子たちには暇が出され、もとの住み場所に帰されました。

協力者その3

福井南警察のお巡りさん



■お巡りさんの先導で山を下りるイッカク

今回の目玉のイッカクは千葉県の海の博物館からお借りしたもので、輸送には美術品専用の4トン車が使われましたが、その搬出にある問題が浮上しました。実は先日の豪雨の際、足羽山とふもとを結ぶ下り道路が土砂崩れで通行止めになってしまい、2本ある上り道路の1つが下り専用で規制変更されました。しかし、この暫定下り道路にはヘアピンカーブがあり、大型車が通れません。となると、搬出は上り道路を逆送して下るしかありません。そこで福井南警察署に許可をお願いし、当日立ち会って頂くことになりました。

さて、閉幕翌日の9月27日、梱包を終えたイッカクが積み込まれ、いよいよ出発です。ふもとでパトカーが待機し、一般車をすべてせき止め、誘導灯を持ったお巡りさんの先導でトラックがゆっくりと山を下りていきます。およそ5分、無事に下りたイッカクはそのまま千葉へと旅立ったのでした。

おうちでよみがえるプロポーズ大作戦!! 電子図録を公開!

今回のテーマは、展示に映像が欠かせません。となると、特別展の図録にも映像がほしいところです。しかし、紙の印刷物では映像を載せることができません。そこで、インターネットで見る「電子図録」を作りました。展示で使われた写真や説明文、そして映像のほとんどを公開しています。ぜひご覧いただき、ご意見・ご感想をお聞かせください。

<http://www.nature.museum.city.fukui.fukui.jp/tokuten/2004sp/catalog/cover.html>



近頃の海産食用貝の事情の一つ

福岡 修 (福井市自然史博物館・日本貝類学会会員)

近頃のマーケット等で売られている生鮮食材には原産国、国内ならば生産地名が表示されています。どこから届いたのかを知る楽しみがあり、遠い外国であればどのような形で入ってくるのかが気になります。

今春の5月28日、熊野方面の旅行に出かけ、山に囲まれた奈良県のドライブインで昼食をとったところ、おかずにパイがついていました。近頃のマーケットではほとんどパイを見かけません。このパイは殻が小さく、縫合部に溝があり、色柄も福井県産のパイと違っており、疑問に思い殻を持ち帰りました。

また、先月開いた法要で昼食をとった鯖江市のレストランでも、パイが出てきました。過日のことを思い出し、同席した何人もの食べ残しの殻を集めて持ち帰り、「奈良県」のパイとつき合わせてみると同じ種でした。

図鑑を調べると、インドネシア近海の浅海に産するボルネオパイ (*Babylonia borneensis*) だとわかりました。近頃はハマグリ・シジミ・アサリ・アワビなどを海外から輸入したり、また有名産地でも幼貝を輸入して畜養し、出荷することが多いようです。種によっては、生き残った



左:ボルネオパイ *Babylonia borneensis* 鯖江市のレストランにて
右:パイ *Babylonia japonica* 福井市鷹巣産 昭和26(1951)年6月20日採集
福井市自然史博物館所蔵標本

外国産の種と在来種との間で雑種ができる可能性もあります。そして、海岸に投棄された貝殻は私たちの様な「磯乞食」を混乱させることになるのですが……こんなことを考えるのは私だけでしょうか。

note

ボルネオパイと同じ属で日本の沿岸に産する「パイ」(*Babylonia japonica*)は、近年急激に個体数が減り、現在漁獲されることはほとんどありません。原因は船底塗料に使われていた有機スズとされています。有機スズはフジツボ等が船底に付着するのを防ぐ効果がある一方で、パイ等いくつかの貝では内分泌かく乱物質(いわゆる環境ホルモン)として作用し、メス個体をオス化させて卵を産めなくしてしまいます。日本では有機スズ塗料はすでに使用が禁止されています。なお、福井の市場で「パイ」という名前で売られているものは、たいていは白くてざらざらした殻を持つ日本海産のエッチュウパイ等です。(学芸員 石田 惣)

特集

博物館につどう人たち ①

～高校生ボランティア～

博物館では昨年夏の特別展より「ジュニア学芸員」という高校生のボランティアを募集しています。これは特別展の企画や準備、展示解説などに実際に関わってもらうことで、学芸員の仕事の面白さを体験してもらおうというものです。昨年の火星展では7名の高校生が集まり、彼ら自身や来館者には好評で、私たちもおおむね成功という評価を得たので、今年も募集することにしました。今回は7名の高校生が参加し、そのうち2名は去年のジュニア学芸員です。

今年の特別展「どうぶつたちのプロポーズ大作戦!!」は性淘汰という進化のしくみを標本と映像で紹介するものなので、展示作成や解説には進化生物学の知識が必要になります。そこで、今回は事前の座学とフィールドワークに重点を置きました。野生状態のイトヨが観察できる本願清水イトヨの里(大野市)見学を皮切りに、自然淘汰・性淘汰理論の座学、展示映像の撮影をかねたゲンジボタル観察会など、まずは「基礎体力」をつけました。

その後、展示準備では「ダーウィンを紹介するコーナー」「ゲン

ジボタルの展示映像の編集」「イッカクの实物大ペーパークラフト」などの班にわかれ、学芸員と全く同じ作業をこなしました。特にペーパークラフトは難航し、実は開幕に間に合わなかったのですが、集まれる日に少しずつ作業をした結果、特別講演会(8月15日)の前日に完成しました。これは子供たちに大人気の展示でした。

開幕後は週末に展示室で解説をしました。展示準備と違って解説はハードルが高く、難しいと感じる高校生も多かったようですが、お客さんと接し、話をするだけでも貴重な体験だったかな?と思います。

ジュニア学芸員は特別展閉幕後に解散するため、期間としては5ヶ月ほどの活動です。しかし、短いながらも密度の濃い活動をしていると言えるのではないのでしょうか。まだ2年目で改善すべき点もありますが、博物館としてはぜひ継続していきたい活動です。(学芸員 石田 惣)



展示解説の練習



イッカクの骨格標本組立



ゲンジボタルの撮影(松岡町吉野にて)



本願清水イトヨの里訪問(大野市)



坂口 拓也君(啓新高校3年)

「今年で2回目でしたが、自然史について深く学べたと思います。今回は期間中に展示解説が出来て、とても良い経験でした。」

本誌は再生紙を使用しています。